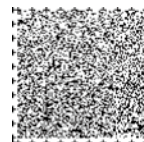


社会福祉法人 創文会
相談支援事業所 ハートピア出雲 情報誌「トピア」



Topia

第68号



<発行所>
相談支援事業所
ハートピア出雲

〒693-0014
出雲市武志町 693-6
Tel: 0853-2 3-2 7 2 0
Fax: 0853-2 3-2 7 2 1
E-mail: shien@heartpia.or.jp
ホームページ
http://www.heartpia.or.jp

エッセイ
の小窓

「気楽にいこう こだわり散歩」

2月のある金曜日の夜、息子が「明日お散歩行きます」と言ってきた。少し気が重かったけれどとりあえず「はいわかりました」と返事をした。

息子は24歳の自閉症。「お散歩」というのは普通の散歩とちがって、ある交差点のお気に入りのカーブミラーを見に行くことである。

翌朝、張り切って家を出発。自分は通過する車や信号待ちの車内からの視線を感じながら息子の歩くスピードについて行く。感覚過敏のため小学校低学年の頃からイヤーマフ（※注釈）をつけているので、人からじろじろ見られるのはいつものこと。

目的の場所に着き、タイマーをセットし「10分だけ見よう」と約束する。南から北に走って行く車の姿が鏡に映って消えていくところを眺め、何台通ったか数えている。その交差点はカーブミラーが2ヶ所あって、2つのミラーに連続して映る車を見ることができる。本人にとっては楽しい場所なのだろうと思う。隣で私は「もし誰かに『何をしているのか』と訊かれたらこう答えよう、こう説明しよう」と頭の中でなんとなく考えてしまいがち、10分が経過するのを待っていた。

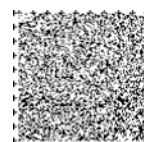
以前、息子と同じタイプの子を持つ親御さんと話をした時、大型ショッピングセンターの2階から1階まで二人で歩いていると同じようにじろじろと見られるけれど「それでも堂々と歩いているよ」と言われた言葉を思い出した。

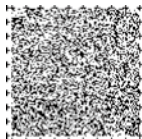
自分に出来ることは、またこれからもこのお散歩を続けて行くこと。帰り道「よかったね」と言って振り返り息子顔を見て、カーブミラーを眺める時間をちょっとだけ長くしてもいいかな・・・と思いながらまた家に向かった。（文：ハートピア出雲 相談支援専門員 柳楽 由紀子）

※注釈【イヤーマフ】 聴覚過敏という特性がある人が利用しているのが「イヤーマフ」。大きな音をやわらげる道具のひとつで周囲の不快な音を遮断する効果があります。ヘッドホン型なので周囲に目立つこともあります。

もくじ

- エッセイ「気楽にいこうこだわり散歩」・・・1 p
- 言語聴覚士からのミニクイズ&市長賞お知らせ・・・2 p～3 p
- 安全運転講習会の報告・・・4 p





言語聴覚士からの「フムフム、なるほど！」～第9回～



言語聴覚士 安立からのお知らせです。

ことば・コミュニケーションについての疑問を解き明かすプログラムの第9回をお送りします。

今回から数回のシリーズでコミュニケーションについて考えてみましょう。コミュニケーションは、人々がいろいろな手段を使って、お互いにメッセージを伝えあうことで成立します。

Question 1 : コミュニケーションは、愛着形成と強いつながりがある。

Question 2 : 話し手と聞き手の役割交替は、3歳ごろからみられるようになる。

Question 3 : コミュニケーションで最も効率がよいのは、書きことばである。

Question 4 : ことば以外の方法で最も情報量が多いのは、表情である。

Q1 = ○

愛着形成とは子どもが不安になったときに、家族など信頼できる人にしがみついて安心する行動といわれています（「愛着行動」ジョン・ボウルビー著 1989年）。

子どもは愛され、大事にされるという経験を積み重ねると、周りの人たちとの情緒的な絆が深まり、情緒が安定し、人に対する信頼感が育っていきます。

愛着が形成されると、子どもは不安なく積極的に行動し、自分の気持ちや要求を伝えることができるようになります。そして、相手の要求も受け入れられるようになるなど、人との関わり方が徐々に上手になっていきます。

このように、コミュニケーションは、家族や周りにいる身近な人たちの愛情に包まれ、人々の助けを借りながら、日常生活の中で育まれていきます。

Q2 = ×

対話では、話し手と聞き手が役割交替しながら会話します。

コミュニケーションは、対話場面に参加することで始まります。

では、授乳中のイラストをご覧ください。

赤ちゃんがミルクを吸っている時は、赤ちゃんが話し手です。

ミルクを飲ませている女性や男性は、赤ちゃんが順調に飲んでいるのか、見守っていますので聞き手です。

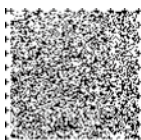
飲むことを止めて休憩中の赤ちゃんは、聞き手に換わります。

その時の女性や男性は、赤ちゃんが飲んでくれるように抱き方を変えてみる、あやすなどして積極的に関わりますので話し手です。

このように、すでに赤ちゃんの頃から、話し手と聞き手の役割交替を経験しているのです。

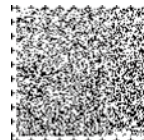


3ページにつづく



Q3 = ×

簡単に素早く伝わってもっとも便利な方法は、話しことばです。



Q4 = ○

「目は口ほどに物を言う」ということわざがありますね。

口ではいいようなことを言っている、本音ではないことが目つきから感じ取ることができます。目はことばを話しませんが、ことば以上の気持ちを伝えることができるという意味です。

コミュニケーションにおいて影響を与えているのは、ことばそのものの情報 7%、口調など耳からの情報 38%、表情などの目からの情報 55%といわれています（メラビアン法則）。つまり、得られる情報量全体の半分以上を占めているのが表情です。

このように、私たちは悲しそうだとか楽しんでいるようだという判断の手がかりを表情から得ているといえます。

いかがでしたか？ 次回はコミュニケーションの続きをお送りします。

（文：ハートピア出雲ステップ児童指導員 安立 多恵子）

三島栄さん、市長賞（写真部門）に選ばれる

昨年の出雲市総合文化祭の写真部門で、ハートピア出雲の職員（運転手）三島栄さんの作品「光の競演」が市長賞に選ばれました。

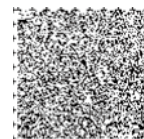
同展は、出雲写真作家協会の主催、同市、同市教育委員会の共催です。会場には四季の風景、人々の日常の表情、動植物の動きなどをとらえた力作が展示されました。

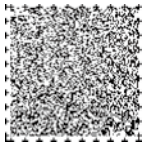
市長賞を受賞されました三島さんは、雲南市の川のほとりで撮影されたとのこと。 「仕事帰りに何度も雲南の山中の小川に通い、数回目にやっとチャンスに恵まれて撮影ができました。ゲンジボタルが乱舞する風景を見て感動した。住民の努力でホテルの住む環境が守られていると聞きます。いつまでも守ってほしいです」と、受賞の喜びを語りました。



●市長賞に選ばれた三島栄さんの作品「光の競演」

●賞状を受け取る三島栄さん（写真右）





内部研修で安全運転管理者等講習会を行いました。

運転で気をつけてほしいこと！！「～だろう運転」から「～かもしれない運転」

「～だろう運転」とは希望的観測に基づく運転です。「こっちが優先だから交差点には進入してこないだろう」、「車通りが多い道路だから歩行者は飛び出してこないだろう」等、危険性が完全に払拭できない状況にも関わらず自分の都合の良い解釈で運転をしてしまうことを「～だろう運転」と言います。

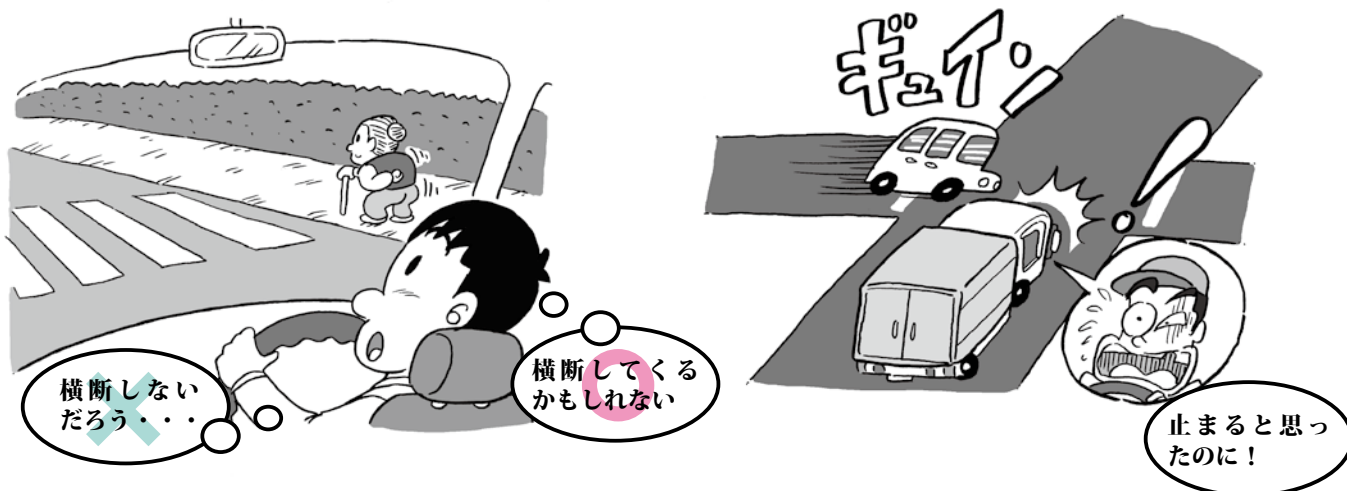
「～かもしれない運転」とは危険予測運転とも言い換えられます。捉えた対象や状況から起こりうる危険な状況をあらかじめ予測しておくことで事故を未然に防ぐ運転をすることを「～かもしれない運転」と言います。

人は運転に慣れば慣れるほど、その慣れを「成功体験」と思い込み、楽なほうへ楽なほうへと独自の安全ルールを作りがちです。「危険はない」という思い込み、それが「～だろう運転」や「漫然運転」を助長します。

反面、意識を少し変えるだけで、運転経験を活かした高精度の危険予測が出来るようになります。多くの場面において、危険は1つとは限りません。「他にも危険があるかもしれない」と常に考えることが必要になってきます。何事にもゆとりとは大事なもので、ゆとりを持って運転をすることで、周囲の車が「だろう運転をしているかもしれない」と考えることが出来るようになります、今まで以上に慎重な運転に繋がっていくと思います。

皆さんも日頃から運転をされる機会が多いと思います。車を運転する際には「危険と隣り合わせ」ということを頭に入れながら安全運転を心がけていきましょう。

(文：ハートピア出雲 安全運転管理者 園山 駿介)



編集後記

◆両手足が動かない生まれつきの障害がありながらお笑い芸人、作家として活躍されたホーキング青山さん。昔、島根大学出雲キャンパスの学園祭で講演をされまして、私も友人と行きました。青山さんが過ごした養護学校時代の友達や先生とのエピソードを毒舌交えて披露される語り口が強烈で覚えています。“聖人君子”的な清らかな障がい者イメージ像をいい意味で壊してくれる芸風が当事者としては爽快でした。残念ながら昨年末に他界されましたが向こうの世界でもガンガン喋ってくれているはずですよ。【編集長 米山】

